

張赫宙の初期長篇作品について : <무지개>
(虹), <三曲線>, <黎明期>を中心に

白川, 豊

<https://doi.org/10.15017/2230662>

出版情報 : 史淵. 123, pp.1-37, 1986-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

張赫宙の初期長篇作品について

——〈무지개〉(虹), 〈三曲線〉, 〈黎明期〉を中心に——

白 川 豊

I

張赫宙^{チャンヒョクテウ} (1905年生, 日本名 ; 野口赫宙) は朝鮮慶尚北道大邱^{キョンサンブク テグ}に生まれ, 1930年頃から小説を発表しはじめ, 以後朝鮮語及び日本語によって創作を続けた作家である。張は1932年4月, 日本の〈改造〉誌の懸賞に〈餓鬼道〉で次席当選して実質的に登壇し1940年代以降はほとんど日本語によって創作し, また日本に定住したため朝鮮でよりむしろ日本で活躍した存在であった。

ところで張は1930年代後半から親日的傾向を強め, その姿勢故に民族を裏切ったとして断罪されている。本人もまた日本に引き続き滞在し1952年頃には帰化したため故国ではもはや論議の余地のない存在として切り捨てられていると言っても過言ではない。それでは日本では多少なりとも注目されているかと言えば残念ながら, 位置づけに苦しむ異色の存在であるせいか, ほとんど取り上げられることがない。

しかし, 朝鮮語で長・短篇合わせて10数篇と, 日本語による創作の単行本だけで1945年以前に20数冊を書いたこの作家の文学がその政治的姿勢だけからすべて無意味なものとして退けられてよいものだろうか。本稿はこの素朴な疑問から出発する。

数少ない張赫宙に対する論議は主として同じく日本語で創作した後輩作家にあたる金史良^{キム サリヤン} (1914~1950 : 1939年〈光の中に〉を発表し, その翌年これが芥川賞候補に上がった。) との比較によってのみなされる場合が多い。次の二例

張赫宙の初期長編作品について

はその典型的なものである。

1945年以前の、張赫宙と金史良の姿は、植民地の文学者における二つの道——屈辱と反抗——を、くっきりと浮彫にしたものである。金史良を考える時、自国の抑圧者に膝を屈した張赫宙の転落の軌跡は、よりあざやかにされていく³⁾。

金史良は日本にいて、日本語でしか書けない状況下で、日本語によって必死の抵抗をした。(……中略……) 張赫宙はどうか。(……中略……) 日本文壇に登場した張赫宙は、初めから文学を「売りもの」にした²⁾。

このように金史良と張赫宙を並べてこの両者を明暗の両極ととらえることはたやすい。しかし一人の作家の創作活動と行為をそう簡単に一刀両断にしてしまえるものだろうか。いわんや朝鮮と日本の間で揺れ続けたようにみえる張赫宙の場合にはそのような決めつけは非常に危険なものに映る。敢えて言うなら、その抗日的姿勢と行動ゆえ‘栄光’を担い続ける金史良より‘汚辱’にまみれた張赫宙の存在の方が重要な問題を含んでいると思われるのである。

既存の関連研究としては日本においては上記の任展慧論文と林浩治論文が主なものであるが、前者は帰化に至る張の歩みと創作行為との関わりを“民族の視点から”考えていくと言い³⁾、後者は“……張赫宙の足跡を追って「日本的」なる価値観の反動性を見たい。”⁴⁾と述べている。この両者に共通するのは張の植民地下での作家の姿勢を問題にしていることで、文学作品としての検討がややなおざりになっている憾みがある。また張の朝鮮語作品についての言及があまりない点も共通している。

一方、朝鮮における論考の中では林鍾国^{イムジョンクク}の《親日文学論》(1966)⁵⁾の〈張赫宙論〉の項と金允植^{キムユンシク}の《韓日文學의 關聯様相》(1974)⁶⁾に収められた〈日本文学의 韓國體驗〉の項にみられる論議がその代表的なものである。前者は書名からも知られるように張の親日行為を資料を駆使して再構成しようとしたもの

であり、後者は張赫宙や金史良の投げかける問題を日本の文壇や政策との関わりから解明しようとしているが、金と張を善玉、悪玉の代表のように扱うことは慎重に避けている。しかしこの項も小論にとどまっているのが惜まれる。

ともあれ本稿で扱う張赫宙の朝鮮語作品についてのまとまった論考はほとんどないといってよい。

それではここで現在知られる張赫宙の略歴を便宜上1940年まで記しておく。

- 1905.10. 慶尚北道大邱生まれ。
1913. 慶北^{キョンジュ}、慶州公立普通学校入学。在校中、大坂六村校長について新羅古蹟探訪。
1919. 同普通学校卒業。ひき続き簡易学校（大坂六村設立）で学ぶ。
1921. 大邱の官立高等普通学校入学。
1926. 同校卒業。青年アナーキストたちの〈真友聯盟〉に入る。秋、慶北^{チョンソン}青松郡の山村で私塾教師。
- 1927.春. 同教師をやめ、小説家を志望するが家庭の事情で再び慶北^{イェチョン}醴泉郡の山村で私塾教師。（以後3年間）
10. 教員検定試験合格。（訓導）
1929. 大邱で小学校訓導。本格的に習作修業をする。
- 1930.10. 《大地に立つ》誌（加藤一夫主宰）に掌篇〈白楊木〉載る。
1932. 4. 《改造》誌懸賞に短篇〈餓鬼道〉入選。東京で3カ月滞在。
1933. 1. 《文芸首都》誌発刊、同人となる。（保高德蔵らと）
- 1934.春. 直指寺^{チクチ}探訪。夏、東京へ。
1935. 2. 東京へ。5. 海印寺^{ヘイン}探訪。
1936. 東京（本郷）で暮らす。野口桂子と交際。
- 1938.10. 京城府民館等で自作戯曲〈春香伝〉^{チュンヒキョンジョン}（村山知義演出）公演。
1939. 6. 第二次ペン部隊の一員として‘北支戦線’、移民状況を視察に。
1940. 1. 東京在住半島名士座談会に出席。

張赫宙の初期長編作品について

次に1937年までの著作活動のうち、単行本と朝鮮語作品を掲げる。

〔単行本〕

1934. 6. 権といふ男（小説集），改造社。
1935. 6. 仁王洞時代（小説集），河出書房。
1937. 4. 深淵の人（小説集），赤塚書房。
1937. 8. ^{サムコグソン}三曲線（朝鮮語長篇），漢城図書。

〔朝鮮語作品〕（○長篇，△中篇）

- 무지개, ^{トンアイルボ}東亜日報, 1933. 9.20.~1934. 5. 1.
・戀風, ^{チヨソン}朝鮮日報, 1934. 9.22.~10. 5.
○三曲線, 東亜日報, 1934, 9. 26.~1935. 3. 2.⁷⁾
・새 뿔, ^{サムチヨソリ}三千里, 7巻3号, 1935. 3. (未詳)
・늑대, 三千里, 7巻8号, 1935. 8.
・契約, 三千里, 8巻1号, 1936. 1.
○黎明期, 東亜日報, 1936. 1. 4.~8. 27. (中斷)
△谷間^{サヘ}의 情熱, ^{コソソ}四海公論, 2巻1号~9号, 1936. 1.~9.

本稿ではこのうち《東亜日報》紙に連載された三つの長篇小説〈무지개〉(虹), 〈三曲線〉, 〈黎明期〉^{ヨミヨソギ}を検討する。この三篇を取り上げるのは、作者自身がこの三篇を意識的に列挙している⁸⁾ ことのほか、張のすべての朝鮮語作品の中で連載が100回を超える長篇はこの三篇だけであり、しかもこれらが皆、初期⁹⁾のうちでも1936年までという張が新進作家としての位置を確立する時期に書かれているためである。

ちなみにこの時期は1931年9月、満州事変が勃発し、朝鮮では同年6月宇垣一成が総督となって‘農村振興運動’を展開することに始まり1936年10月南次郎新総督が〈鮮満一如〉を唱えさらには1937年7月の日中戦争勃発とあいまって〈内鮮一体〉が叫ばれるに至る時期にあたる。このような時代の中で張赫宙

の朝鮮語長篇はどのような意味を持つのであろうか。

次章以下ではこの三篇を①時と場所の設定, ②人物設定と性格付与, ③形式的構成と内容の展開, ④創作意図, 内容の傾向, 主題, 作家の対社会・時代認識, ⑤描写, ⑥表現と表記法, ⑦伏字, 削除の問題などの諸点にわたって検討する。また〈三曲線〉では新聞連載のものと単行本との異同を整理し, 〈黎明期〉ではその前篇にあたる〔農村篇〕とその改作である日本語作品〈田園の雷鳴〉(1940)との関係をも考察したい。さらにこれらを踏まえて三篇を比較し, また同時期に発表された他の朝鮮語作品あるいは同時期の日本語作品との関連についてもいささか言及したい。

II

II-1. 〈무지개〉(虹)

まず形式的構成を見るために章立てを示す。

- 1.¹⁰⁾ 手紙¹¹⁾〔5〕¹²⁾ / 2. 相談〔7〕 / 3. 風と波〔9〕 / 4. 小さな波紋〔10〕 / 5. 咲く花〔13〕 / 6. 情熱〔10〕 / 7. 最初の誘惑〔8〕 / 8. 飢えた狼〔6〕 / 9. 離合〔17〕 / 10. 難破船〔12〕 / 11. その後〔7〕 / 12. 暗闇〔7〕 / 13. 罪〔6〕 / 14. 生と死〔7〕 / 15. 憎しみ〔6〕 / 16. 女工〔4〕 / 17. 寂しい心〔10〕 / 18. 風〔10〕 / 19. 当選〔4〕 / 20. 出獄〔6〕 / 21. 発展〔5〕 / 22. 八月〔5〕 / 23. 虹〔5〕 / 24. 東京行〔4〕 / 25. 悪〔8〕 / 26. 毒花〔7〕 / 27. 赤い土〔2〕 (計200回)

これをみると章によって長さにはばらつきがあり, 4~6章, 9~10章と前半から中盤部分にかけて章が長くなっていることがわかる。

次に主要人物を列挙しておく。

張赫宙の初期長編作品について

イ ナム チョル
李 南 喆 (27, 8才) : 大邱の普通学校教員。元慶州青年同盟員。故郷は半
農半漁の慶北・良浦。

キム ヒヤンフア
金 香 華 (24, 5才) : 金持ちの娘。南喆に接近。

ユン ヘ ヨン
尹 恵 英 (24, 5才) : 南喆の昔の教え子。急進的。

パク イ ソク
朴 二 石 (27, 8才) : 南喆の青年同盟員当時の同志。ルーズな文学青年。

オ ス ヨン
呉 守 蓮 (24才?) : 香華の小学校同窓生で貧しい生命保険の外交員。

アン スク ヒ
安 淑 熙 (30過ぎ) : 南喆の前の下宿の女主人。「主義」に理解示す。

これらの人物をめぐって富豪の鄭完秀^{チョンワン ス}、悪徳弁護士の崔俊永^{チエジュンヨン}、教会長老
でありながら悪徳医師の徐永煥^{ソ ヨンファン}、新聞支局長の趙和燮^{チョフアソア}、自称詩人の許笑人^{ホソイン}、
自称評論家の金甲鉄^{キム ガブチョル}らを配している。

時は執筆とはほぼ同時期である1931年前後の秋から翌年の秋までと、その翌年
の初夏から晩夏までで、大邱を主舞台として一部、良浦と東京、横須賀での話
も織りまぜている。

話の概略は次の通りである。

南喆は理想に燃える青年教師で小説も書き、昔の同志が訪ねてくると資金
を融通してやったりする。ある日教え子の女学生香華、恵英と歩いていたと
ころ新聞にその中傷記事が出た。香華は退学し、南喆に愛を告白するが彼の
方は恵英に気があった。南喆はその恵英を「運動」のため上海に送り出す
が途中で捕まった彼女は朝鮮に連れ戻され、南喆は資金提供などの嫌疑で逮捕
される。

朴二石は雑誌社を作ったがその金策のために開いた園遊会が失敗、叔父の
代書事務所に勤めながら南喆の書いた長篇小説を盗作して懸賞に応募し当選
する。

一方、呉守蓮は甘言に乗せられて鄭完秀の妾になるが妊娠するや無理に中
絶させられる。目醒めた守蓮は上京し女工となって労働運動に身を投ずる。
また恵英も後を追う。

南喆は翌年出獄し、故郷に下る。ここで夜学を興そうとするが有力者に資金援助を頼んだことで急進派青年たちに襲われ自己嫌悪に陥る。そこへ娘がだまされて日本に売り飛ばされたという母親の頼みがあり東京に向かう。しかし救出には失敗、ここで奇しくも再逢した香華の誘惑も退け、幻想を捨てて朝鮮に帰る。南喆は朝鮮の赤い土が懐しかった。

全体は南喆を中心に大きく三つに分かれている。10章までが前半で話は順次展開するが南喆の逮捕後、11～19章まで南喆抜きの中盤となり他の人物たちのエピソードで綴られ、20章から再び南喆中心の後半部となる。この後半の舞台は中盤までの大邱ではなく23章まで良浦、24章からは日本である。故郷良浦での話は農漁村運動の記であり、日本での話は通俗的活劇の展開と日本に対する文明批評の開棟になり結末に向かっての収斂がみられず、連載回数延ばしの印象を与える。そして最後の27章で付け足しのように啓蒙的な結末に引き戻している。従って〈虹〉は構成と展開に問題があると言わざるを得ない。また終盤で朝鮮に戻ってきた南喆が列車の中で朴二石と出くわす場面があるが(201)¹³⁾、このような偶然の邂逅の連発(142等にも類似の出会いあり)は前近代小説的手法である。それから時折、作者が直接読者に語りかける部分(65, 115, 124等)も新聞小説としての旧套に属する。

次に登場人物は善玉、悪玉と区別ができるがこれは作家自身“悪徳詩人、諷刺詩人、医師、純真な男女、意志薄弱な人、他人のあら捜しばかりする人、こんな人を描こうと思う”¹⁴⁾と言っているように、類型的性格の付与に何の疑問も感じていなかったことを示している。しかし南喆にはやや複雑な性格が与えられている。ここには張赫宙の経歴や思考と行動がある程度反映されており、その一部は朴二石に分け与えられているようである。

一方、金甲鐵の口を借りて李光洙、廉想涉^{イグアンヌ、ハンサンソフ}ら張にとって先輩にあたる作家を酷評させ、南喆に朝鮮文壇には小説家らしい小説家もおらず詩人や評論家も幼稚だから自分はそんな文壇には出たくないと言わせている(41)。これは張の日本文壇への進出をさりげなく弁明したものと受け取れる。またこの同じ

張赫宙の初期長編作品について

回で南喆は朝鮮文壇の現状について「嫉妬、憎しみ、蔑視、このようなものが文壇人の心の奥に巢食ってはいはしないかと思った。」と語るがこれは後日(1939年)〈朝鮮の知識人に訴ふ〉¹⁵⁾ 等における張の朝鮮人観がすでにこの作品の時期(1933年)には形成されていたことを物語っている。

次にこの作品では張赫宙の‘左傾’体験をとどめるように恵英をして自分の貧窮は全く社会的な原因に帰すると言わせたり(97)、二石と、文学と運動の関係を論じながら南喆が運動(主義)に身を捧げないのが不満だと言わせたり(99)し、16章では守蓮の女工としての運動を手紙の形で紹介している。しかしこれらは作品全体の中での色どりにすぎず、社会問題は本格的には掘りさげられていない。南喆は夜学を興す決心をして“何よりもまず教育だ。彼はそう信じた。”(171)と言う。これは李光洙流の準備論に基づく心情的レベルの啓蒙主義である。出獄するまで南喆は“彼が目標とした××(運動? = 筆者)に身を捧げようと思った。／しかしどうやって? こう考えると世の中は真暗に思われた。”(161)というように出獄後も運動をやるとはいっても具体的な方法は夜学ぐらいしか許されない状況でもあった。結局彼は“過去のことをすべて忘れようと思った”(201)。過去のことは幻にすぎないから水に流して一からやり直すというのである。ここで小説の題名である〈虹〉を想起したい。「虹」は次のように使われている。即ち南喆が故郷で急進派青年たちに殴られ自己嫌悪の念にとらわれている時、ふと空を見上げると虹が出ていた。“彼は思った。彼はただ虹を夢みる男ではなからうかと。美しく華麗なことばかりを思い、それがすぐ消え去ることも知らずにいたのではないかと。根なし草の考え! ……”(181)。ここでは「虹」は希望に満ちた貴いものというより移ろいやすい幻影のようなイメージで促えられている。また最終回で南喆は自己反省しながら“彼が自分の生と事業を最後まで押し進めようとするなら自分の心の奥にある幻想、夢、こんなものをなくしてしまわねばならないと改めて思うのだった。”(202)とも言っている。つまり「虹」のように不確実なものを追い払って足が地についた生き方をすべきだというのであろうがこのような抽象論が具体的になりうる条件や方途は何ら提示されていない。それ故結果的にこの

作品は通俗的興味で読ませる通り一遍の啓蒙的色彩の小説に終わってしまったのである。

以上この作品の短所ばかり挙げつらいすぎたかもしれない。が、描写力においてはなかなか優れている部分もある。例えば、朴二石が盗作のことがばれ、あれこれ動揺する部分(161)は彼の優柔不断さをよく表現しており、また南喆が下郷途中で乗り込んだ船でのボーイの民族差別的な行為に腹を立ててやりあう場面(165)では的確な表現と速い展開で読む者を魅了する。また南喆を歓迎する故郷の青年たちとの沖での舟遊びの場面(168~169)では美しい風景と心情がみごとに融けあって活写されており、この作品の中で最も美しい部分となっている。

次に用語や表現面から若干整理しておく。まず大部分慶尚道地方が舞台であるだけに会話部分に方言が出てくるのは当然として、地の文にも‘멘그리다’ ‘맹글다’ ‘맹글다’ (標準語は‘만들다’)のようなこの作家独自の用語が目につく。表記法の特徴として‘三四일’(三四日), ‘열七八되는 여자’(十七, 八になる女)のように漢数字を交えていることがあげられる。(後者は七八を 일곱 여덟と読ませる?)

次に日本語あるいは日本語式表現の問題がある。その例を次のように分類してみる。

- ①日本語の名詞の発音をそのままハングル表記したもの：(()内はその意味)

인치기 [インチキ], 우리꼬 [売子], 오뎨바 [お転婆], 「다네」 [タネ],
 마찌아이 [待合], 엔따꾸 [円タク], 사똥라 [桜], 쏘쥬 [女中], 「마에
 이화이」 [前祝], 시메끼리 [締切], 빠가 [馬鹿], 구루마 [車], 나쓰미
 깡 [夏ミカン], 아사 [麻], 쓰매에리 [詰襟], 이로 [情人], 시로-도
 [素人], 이나까모노 (시골똥이) [田舎者]

- ②語幹部分は日本語, 語尾部分は朝鮮語の合成語等：

농끼한 [のんきな], 모메루한 [もてるという], 히야가시하였다 [ひやか

張赫宙の初期長編作品について

した), 마지메한 [まじめな], 나마가지리한 [生かじりした]

③日本語式漢字語を発音だけ朝鮮語音にしたもの:

랑하 [廊下], 우편국 [郵便局], 잔교 [棧橋] (소뿌르) 근성 [(プチブル) 根性]

④日本語式発音の外来語表現のもの:

택시 [タクシー], 비라 [ビラ], 싸쓰 [シャツ], 마라손 [マラソン]

⑤日本語的表現を直訳しているもの:

· 사람 좋게 웃고는 [人の好きそうに笑っては] (38)

· (着ている服は) 도청급사로 밖에 보이지 않을 물건이었다. [道庁の給仕にしかみえない代物だった。] (138)

⑥会話部分全体が日本語をハングル表記したもの:

· “조—센진 시요—가 나이” [朝鮮人しょうがない] (94)

· “[스바라시이네— (평장한테)]” [すばらしいねえ] (197)

全体として単語では当時よく使われていた日本語が大半で、あまり耳慣れないものには傍点を付けたり()内に訳がある。その他は無意識に借用している場合と意識的に取り入れてややふざけた感じを出した場合があるようである。

それでは最後に伏字・削除の問題を考えてみたい。まず伏字の例をあげておく。

우리에게 나린 지령은 ×××여들에게 ××××을 넣으라는것이
당면 임무가 되어있지않어요。(150) [我々に下された指令は×××?ら
に××××を入れよというのが当面の任務になっているじゃありませんか。]

그러나 향화가 남철의 몸에 그의 ×××××된 ×을 ××××
×, 그는 조금씩 장신을 차리었다。(200) [しかし香華が南喆の体に彼女
の××××した×を××××, 彼は少しずつ正気にかえった。]

前者での伏字は政治的な内容の部分であり、後者は好色的な表現に関するものである。このほかの伏字は2～3字程度のものが数カ所あるが、いずれも容易にその語が推測できる。また意外にも‘사회주의’（社会主義）は伏字になっていない。

次に削除部分であるが、46回〈情熱，三〉は編集者の註記で、全文が省略とされており同日分は同じ46回だが〈情熱，四〉にとんでいる。前後の回から推して社会改革論議の部分と思われる。また165回でも船中で南喆とボーイが口げんかしている場面で（五行畧）とある。これも民族差別的な発言の部分であろう。

伏字や削除は案外少ない方かもしれない。ただこれは検閲の結果であって、検閲以前に作家が自主規制するということも当然考えられねばならないだろう。

II-2. 〈三曲線〉

この小説は《東亜日報》紙に連載された後、1937年8月漢城図書から現代長篇小説全集の第8巻として出版された。ちなみに張赫宙の朝鮮語作品の単行本はこれ一冊だけである。その意味でもこの作品は重要であるがここではまず新聞原載のものを検討した後、単行本との異同関係をみることにしたい。

まず章立ては次の通りである。

- 1.¹⁶⁾ 電話〔4〕
 2. 金鍾澤〔2〕
 3. 仙姫〔2〕
 4. 月の光〔4〕
 5. 徐英珠〔3〕
 6. 恋しい人々〔4〕
 7. 晩饗〔7〕
 8. 避暑〔16〕
 9. 求愛〔9〕
 10. 芽吹き〔9〕
 11. 惑う心〔13〕
 12. 罨〔11〕
 13. 新婚〔4〕
 14. 新たな意志〔3〕
 15. 決心はしたものの〔6〕
 16. 金はあるものの〔7〕
 17. 結合〔5〕
 18. 波紋〔4〕
 19. 南下〔6〕
 20. 後日譚〔3〕
- （計122回）

張赫宙の初期長編作品について

この作品でも中盤の8～12章が長い。

主要人物は次のようである。

尹昌鎮 (24, 5才) : 東京留学生で詩も書く。故郷は慶南・院洞。女好きだが根はまじめ。

李相守 (31, 2才) : 大地主で書籍文具店を経営。お人好しだが妻に不満。

金鍾澤 (30才前後?) : 金持ちの遊び人。妻を囲っている。ちょっと鈍感。

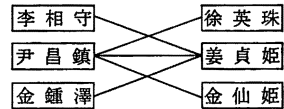
金仙姫 (20才前後) : 鍾澤の妹でお転婆娘。

姜貞姫 (28, 9才) : 女学校の家庭科教師。根はまじめだが男好き。

徐英珠 (18, 9才) : 昌鎮と同郷。母一人故郷で病臥。ミッション系女学校卒。

これら6人の男女が織りなす人間関係はまさに下のように‘三曲線’をなしている。

この6人以外には鍾澤の妾ケナン(개난)とや
はり鍾澤の友人で遊び人のチェピルス(채필수)
の二人が主要人物である。



時は執筆とほぼ同時期の1934年と思われ¹⁷⁾、初夏で始まり翌年の春で一旦終わり最後に後日譚がついている。舞台は大邱中心で一部が釜山(부산)の海雲台(해운대)と院洞である。

粗筋は次の通りである。

李相守は姜貞姫に気があり姜は年下の尹昌鎮と昔から親しい。尹は同郷の徐英珠の面倒をみてやっているが金仙姫から慕われている。兄の金鍾澤も姜に気があるが姜は鍾澤をばかにしている。

海雲台に一人で避暑に出かけた貞姫は寂しくなって昌鎮を呼び寄せるが折しも大雨となる。故郷が心配になった昌鎮は院洞に下って救護活動に従事、留まって農民啓蒙に乗り出す。ここで彼は英珠と将来を約束するが金策で大

邱に戻った昌鎮は仙姫と再会、彼女の情熱に負けて儒城温泉に逃避行。しかし居場所をつきとめた鍾澤と貞姫が追いかけて直談判の末、昌鎮と仙姫は正式に結婚することになった。負けた貞姫はまじめ教師に一旦戻るが男なしでは寂しく、金はあるがもてない相守と意気投合、結ばれてしまう。

一方英珠は昌鎮の変心を知り悲しむが田舎での夜学教師に生きがいを見いだす。

相守たちは平壤^{ピョンヤン}、ソウルと遊び暮すが金が尽き相守一人大邱に下る。結局彼は貞姫を捨て妻のもとに戻る。昌鎮たちは東京留学を終え、ソウルで平和な生活を始めた。

全体は三部に分けられる。6人の男女の関係が語られる7章までが前半、新たな事件が展開し昌鎮たちの逃避行が一件落着くまでの8～12章が中盤、広い意味での後日譚的な13章以降が後半といえる。

前半では6人の複雑な恋模様が通俗的興味をもって描かれており、中盤では最初の海雲台での話は恋愛遊戯に終始しているもの大雨以後の部分では昌鎮の活躍を中心に展開し、内容的に比較的充実している。しかし後半に入ると急に内容は弛緩し、章を追うに従い中盤部までに対する後日譚的な側面を濃くしていく。17章以降は筋を追うだけの叙述となり最終章(20章)はまさに小題名自体が〈後日譚〉になってしまった。13章以後は回数引き延ばしの感もある。また作家が直接読者に語りかける手法は全篇で5か所だがそのうちの3か所は最終章に集中している。かくて〈三曲線〉も形式的構成、内容的展開ともに密度のバランスを欠いていると言わねばならない。

次に登場人物は〈虹〉とは違い6人がそれぞれ主人公格で活躍するスタイルをとっている。ただ尹昌鎮と姜貞姫に比較的力点が置かれている。またこの作品では善玉、悪玉という色分けは大して重要でなく、むしろまじめとふまじめの間で揺れる決断力のない人物が大半を占めている。根っからの遊び人は鍾澤だけであり、まじめ一筋は英珠一人である。ただ昌鎮を最初、プレイボーイのように設定しておきながら大雨以降にまじめ人間にしてしまったのは性格の統

張赫宙の初期長編作品について

一上、難がある。

それではこれらの人物を通して作家は何を言いたかったのであろうか。このことを考えるために次の一節を引いてみる。

〈三曲線〉は他の作品 〈虹〉 や 〈黎明期〉 等よりずっと読者の興味を主にし
て書き始めた。しかし連載している間にいつの間にか教訓的な筆致が入るよ
うになった。これは私の欠点であるとは思いますが、また当然入らなければなら
ないことであると信ずるのである。享楽型の男女と真実型の男女を対照しな
がら話を進め、そうすることによって読者に正しいものを分別させるように
したのである¹⁸⁾。

これをみると張は書き始める前に確固たる主題意識とそれに伴う構成を持つ
ていなかったように受け取れる。このような姿勢で書かれた作品によって読者
が啓蒙されうると考えたとしたらこれは作家の傲慢というものであろう。また
実作はここで言うように「享楽型」と「真実型」に機械的に二分できないこと
は前述した通りである。

内容上の傾向をみると確かに娯楽色が強い。次の例はそのような部分であ
る。

仙姫はピアノを買って二年にもなるがいまだに弾けるのは「アリラン」か
「酒は涙か……」しかないと言がからかう。(6)

(貞姫は一人寝ながら) “人魚のような体をあちこちによじらせて燃えるよう
な情熱を消そうと苦しんでいる。” (17)

このようにコミカルな内容にしたりエロチックな描写をはさんだりして読者
サービスに努めている。またこの作品では全篇にわたって貞姫という女性の情
欲をかなり直接的に書いているのが目立つ。その例を一つ引いておく。

彼女は生理的に起こる情欲と情熱を自分自身の力では抑え難かった。彼女が李相守に近づいたのはただそのためだったといえるが……(43)²⁰⁾

一方、中盤では昌鎮が故郷で救護活動をしながら農民の衛生観念の欠如を慨嘆し、また農村の窮状を見るにつけ「××主義」に加担したことはなかったが彼らの理論がそれなりに正しいと思われたとまでいうのである(42)。²⁰⁾ そして昌鎮は英珠に次のように語る。

…農民の中に入ってそれなりに学問もした力を役立てて今少し彼らの暮らしが楽になるよう指導してみたいし彼らの生活を擁護すべく、いわばそのナニの仕事もしてみたいが…(53)

と農村啓蒙に身を捧げる意向を示す。これは1931～34年の間、東亜日報社主催で繰りひろげられていた学生たちの休暇中の帰郷啓蒙を中心とした〈ヴ・ナロード運動〉を意識した書きぶりと言えよう。が、この農民啓蒙や社会改革への意志はその場限りのもので、この作品の主題とはなり得なかった。現に昌鎮は結局、故郷と英珠を捨てて都会で仙姫と小市民生活を送ることになるのである。

次に描写面について優れた部分を挙げると、中盤の終わりの部分（特に81～84）は展開もスピーディーで迫真力があり、また男性心理の描写もなかなか巧みである。一つだけ例示してみる。

（昌鎮は自分に好意を寄せている仙姫に縁談が持ち上がるや）彼は自分の心の底から湧きおこる嫉妬が、彼に好意を持っていた女がそのまま遠ざかってしまうということを措しがる気持から生じたことに気づく時、心の中でもう一度驚いた。(73)

このような洞察力と描写力がありながら後半で息切れしてしまったのは残念である。

次に表現と表記の面を簡単にみてみたい。まず方言の使用は舞台が慶尚道地方であるにもかかわらず会話部分にはあまりなく、むしろ地の文で ‘기대리다’ ‘기두르다’ (標準語は ‘기다리다’) や ‘질겁다’ (同 ‘즐겁다’) 等用言の方言語形がみられる。一方, ‘一一히’ (일일히) のような漢数字の混用も依然ある。日本語や日本語式表現については次のように整理できる²¹⁾。

①日本語の発音をハングル表記したもの：(主に名詞)

오미야게 [お土産], 시보리 [しほり], 유까다 [ゆかた], 고—도 인바
이 [高度淫売?], 마에 이와이 [前祝], 가다까기 [肩書], 꼬대꼬대 [ご
てごて], 기지 [生地], 이나라빼이 [田舎っぺ], 하나레 [離れ], 쇼—지
[障子], 다다미 [畳], 도진노마 [床の間?], 간빠이 [乾盃], 우메보시
[梅干], 오차시키 [お座敷], 나치미 [なじみ], 나까이 [仲居], 구루마
[車], 마쳐아이 [待合], 돈부리 [丼], 스키야끼 [すきやき]

②一部日本語, 一部朝鮮語の合成語等：

마지메—한 [まじめな], 히야까시히르 [ひやかしに], 아이마이 하십니까
[あいまいですか]

③日本語式漢字語を発音だけ朝鮮語音にしたもの：

산보 [散歩], 랑하 [廊下], 형매 [兄妹], 흑판 [黑板], 중학시대 [中学
時代], 소질수 [小切手], 원족 [遠足]

④日本語式発音の外来語表記のもの：

빼카단 [デカダン], 또아 [ドア], 링 [鈴], 케—키 [ケーキ], 바—레
[バレ—], 사—브 [サーブ], 가루다 [カルタ], 프로그램 [プログラム],
에레베—타 [エレベ—タ]

⑤会話部分全体が日本語をハングル表記したもの：

「아라이 랏샤이」 [あら, いらっしゃい], 「마—진상」 [まあ金さん], 「오
히사시부리네」 [お久しぶりね] (以上103)

また「오라이!자!감빠이!»〔オーライ!さあ!乾盃〕(113)のように複合的に表われている場合もある。中には‘미력’〔魅力〕の如く日本語にひきずられた発音表記になっているものもある。またこの作品では日本語式語法や構文に影響された破格の朝鮮語が随所にみられる。次にその例を示す。

- ・ 하하하 유쾌유쾌……〔ハハハ，愉快愉快〕(33) (유쾌하다, 유쾌해程度が普通の語法)
- ・ 그의 초조하고 있는 마음…〔あせっている〕(1) (초조한が普通の語法)
- ・ 그러나 우리의 하는것은…〔しかし我々のやることは〕(76) (우리가 하는 것은が普通の語法)

これらを見ると張赫宙は文章をまず日本語で考えてそれを逆に朝鮮語に置き換えていたと思われるふしがあり，現に習作当時からそうしていたらしいのだがこの問題は本稿ではこれ以上触れる余裕がない。

では最後に伏字・削除関係を見ると伏字の方はごく少なく，削除も10章(52)で病臥した昌鎮が“被災民の惨状は天災によるものとはいえ〔中畧〕”とあってそのあとすぐ見舞に来た英珠のことばになっている部分ぐらいである。削られた分量は不明だが，「水害も人災だ」といった内容と思われ検閲による削除と考えられる。(なお単行本ではこの〔中畧〕という表示も削られている。)

それでは次に《東亜日報》紙原載のもの(以下《新聞》と略す)と漢城図書版の単行本(以下《単行本》と略す)を比較してみたい。この両者の間には2年以上の歳月が経っているためか多くの異同がある。それは形式的構成，表記，添削修正等に及んでいる。

まず章立ての異同関係を示す。

張赫宙の初期長編作品について

《新聞》	—————	《単行本》
1 章	—————	一 章
2 ~ 4 章	—————	二 章
5 章	{ (13)(14) ———	三 章
	{ (15) ———	
6 章	—————	四 章
7 章	—————	五 章〔但し (25) は欠落〕
8 章	{ (27)~(38) ———	六 章
	{ (39)~(42) ———	七 章
9 章	—————	八 章
⋮		⋮
⋮		⋮

《新聞》の10章以下は《単行本》の九章以下と〈回〉以上のレベルでは形式的構成上完全に対応している。(内容が全く同じという意味ではない。) 以上をみると大体において《新聞》での章をまとめているが、逆に分章して前後の章に振り分けてもいる。全体では《新聞》の全20章は《単行本》では全19章になっている。この改訂は内容からみて概ね首肯されるものである。ただ7章の(六)(25)²³⁾を欠落させているのは話は通じるものの構成上片手落ちといえよう。

次に表記面でも相当の違いがある。まず綴り字や分かち書きが現代表記に大分改められている。反面、一部ではむしろ改悪されている場合もある。これらの例の中にはミスプリントと思われるものも多く、《単行本》の校正のずさんさを示している。また会話の中での句読点を《単行本》ではほぼ全廃している。(例: 아, 그거 조치요. → 아 그거 좋치요)

一方、文尾を若干改めた場合もある。(例: 걸지 안었든가? → 걸지 안었는가?) また単語を一部入れ替えたものもある。(例: 전령 → 전화) 次に日本語のハングル表記の際あまり一般的でない語には傍点が付いていたがこれを大部分削った。これは張が日本語を外国語として扱う意識の後退ともいえ、時代の

趨勢でもあろう。

さて最も問題となるのは内容の異同である。《単行本》では《新聞》での内容をかなり修正しているが、これは字句の書き替えから大巾な内容の削除にまで及んでいる。まず大巾に書きかえているのは9章（求愛）（三）（45）²⁴⁾で、大雨の後、海雲台に一人残った貞姫のもとに元同窓の妓生ケナンが訪ねてくる場面で《新聞》ではボーイにケナンが来たと言わせているのに対し、《単行本》では妓生らしい女とだけ告げられ、面会してはじめてケナンとわかるようになっている。従って貞姫が妓生の友人についてボーイに弁解する部分も《単行本》では省かれすっきりしたものになった。

このような修正はうなずけるとして次に削除の場合をみてみたい。例をあげる。

（昌鎮が仙姫にショパンの曲を弾いてやりながら言う場面）

그때 ^맘소판의故국——「포—렌드」이죠——（이「로시아」에 ××이 패
어잇섯는데 ^맘그것일 버서나려구 혁명××을 이르키었지요。） 그러나
마침내 패전이 되어서…(8)

訳：その時ショパンの故国——「ポーランド」ですが——（このロシアに××
されていたんだがそれを逃れようと革命××を起こしたんです。）しかしつ
いに敗戦になって…

上記のうち（ ）の部分が《単行本》では削除されており、——線部分は
“××이 되었는데”と修正され新たに伏字が生じている。

このように政治的な内容によると思われる削除はこのほかに42²⁵⁾、105回にもみえ、特に91回の英珠の夜学活動に関する部分は《新聞》で26行にわたる大巾な削除である。次には好色的な内容の削除が48回に会話部分を中心に10数行ある。その他は冗長部分のぜい肉落としのための削除が15, 23, 27, 33, 40, 47, 50, 121の各回にあり、特に33回のもは24行分に及ぶ。

張赫宙の初期長編作品について

これらの修正・削除の結果、冗長部分はかなり是正されたが内容がやや平板になった感は否めない。ただ削除の大部分が直接、間接の検閲によるものであるだけに一概に作家を責めることはできないであろう。

II-3. 〈黎明期〉

〈黎明期〉は1936. 1. 4. から 8. 27.まで《東亜日報》紙に連載されていたが、日章旗抹消事件²⁶⁾のため同紙が無期停刊となり中絶した作品である。作品は〔農村篇〕(125回)と〔都邑篇〕(82回²⁷⁾まで連載)に分かれている。まず章立てを次に示す。

1. ²⁸⁾ 白雪〔4〕／2. 月光のもと〔7〕／3. 双六遊び〔8〕／4. 病気見舞〔9〕
／5. 玉礼〔4〕／安羅〔4〕／7. 新道〔11〕／8. 開通式〔14〕／9. 半月〔10〕
／10. 黄日道²⁹⁾〔12〕／11. 暗流〔13〕／12. 脱出〔4〕／13. 脱出余波〔2〕
／14. 新春〔9〕／15. 離村〔13〕(以上〔農村篇〕)

1. 五月の朝〔9〕／2. 訪問者〔12〕／3. 誘惑〔8〕／4. 崔山〔5〕／5. 退職
〔4〕／6. 風波〔11〕／7. 魔窟〔25〕／8. 暗雲〔8+?〕(以上〔都邑篇〕 82
回まで)

〔農村篇〕は中盤の7～11章が長く、〔都邑篇〕では6～8章が長い。この作家の長篇小説構成上の常套からみて〔都邑篇〕はこのあと本来の後半部分数章が構想されていたものと思われる。回数も〔農村篇〕とほぼ同じものを考えていたとすれば両方の合計で250回ほどになり〈虹〉を上まわる一大長篇ということになる。

それでは〔農村篇〕から見ていきたい。まず主要人物は次の通りである。

キム ジョンハン
金 宗 漢³⁰⁾ (51, 2才) : サンマ村 (삼마洞) の両班 (進士), 大地主。

イン チョル
金 仁 喆 (青年) : 宗漢の子。遊び人の兄仁道と対照的なまじめな青年。

申 汝 元 (中年)：村長。宗漢と近い。娘に安羅。

申 安 羅 (18才)：ソウル遊学帰りの新女性。兄に遊び人の申完守。

尹 雷 雨 (青年)：村の急進派の青年闘士。

黄 日 道 (青年)：村の遊民。権力者に媚びる男。

趙 蕙 薰 (40才前後)：甘村の両班，大地主で宗漢のライバル。学校費評議員。

姜 太 亨 (4～50才)：ソウルナドゥル(서울나들=京津市場)の飲屋主人で学務委員。肩書き好き。

蔡 尚 局 (中年)：サンマ村の飲屋主人で姜のライバル。

蔡 玉 礼 (17才)：尚局の娘。意志が強い。

松 本 某 (中年)：町の道評議員。元裁判所の通訳。

このほか登場人物は多い。

時は執筆と同時期かやや前の1930年代前半と思われ、その旧暦1月15日から春にかけてと、その翌春(14, 15章)である。舞台は慶尚北道ボンイェ(봉예)郡³¹⁾サンマ村が中心であるが郡以下は架空の地名で³²⁾、張赫宙が私塾教師時代に過ごしたことがある醴泉郡をモデルにしているようである。

粗筋は次の通りである。

学校費評議員の肩書がほしい金宗漢はその運動をしに町に行つての帰りに大雪で馬から落ち仁詰らに救出される。彼を見舞つた申村長はライバル趙蕙らへの対抗策を話し合う。しかし村の主導権は趙蕙，姜太亨らに握られたままである。彼らは松本某と組んでいる。松本は村一帯を開発して利益をあげるべく土地を買収しようとしている。それでこの山村に投資して新道を作つた。尹雷雨は仁詰にこの内幕を説き開かせた。新道の開通式で村は沸いたがそれも終わった今、趙蕙宅で学校費評議員当選祝賀宴がたけなわである。この場を利用して姜らは共有地売却に承諾の判をとってまわろうとするが申村長にすかされて失敗、黄らは後日、腕力で判をとろうとして駆けつけた雷雨にぶちのめされる。

張赫宙の初期長編作品について

しかし雷雨、仁喆らはその後、過激派として逮捕される。

一方、安羅は仁道との縁談が進められ困惑し仁喆に相談する。が仁喆は玉礼の方に気があってらちがあかず、安羅は一人ついに村を脱出する。翌春、松本は共有地をものにし村の状況は変わりつつあった。玉礼は趙薫の妾になれという父に反抗し、好きな仁喆と村を抜け出すことにする。仁喆はひとまず玉礼を送り出したが不安になり後を追う。

以上の内容は三部に分けることができる。まず6章までが前半で、村の状況が述べられ主要人物がほぼ出揃う。ついで7～11章が新道の開通式をめぐる事件とその後のことを扱った中盤で、12章以降が安羅、玉礼、仁喆の脱村を中心に描いた後半である。この〔農村篇〕でも中盤の章が長い。ただ8章の後半(56～61)では本筋とはほとんど関係のないどき廻りの劇団の話が挿入されており構成上難がある。

次に〔都邑篇〕の方をみると、まず主要人物は次の通りである。

申 安 羅 (19才)：幼稚園の保母に。

金 仁 喆 (青年)：玉礼を捜しまわる。

蔡 玉 礼 (18才)：売春窟に売られる。

金 二 順 (30才前後)：幼稚園の保母。

崔 山 (中年)：二順の夫でならず者。元「主義者」。

柳 夏 永 (30過ぎ)：高等普通学校教師。

金 俊 亨 (中年)：東亜日報支局長で幼稚園長。

〔農村篇〕の安羅、仁喆、玉礼の三人だけが共通で柳夏永は〔農村篇〕に名だけ出ている。あとはすべて〔都邑篇〕だけの登場人物である。

時は〔農村篇〕に引き続く同年の春から夏にかけてと、翌春から梅雨時までとなっており、舞台は架空のウンチョン町(웅천邑)³³⁾である。これは慶北・金泉キムチヨンをモデルにしたようである³⁴⁾。なお〔都邑篇〕での地名はすべて架空であ

るが実在の場所が比定できる。

話の概略は次のようである。

安羅は柳夏永の斡旋で金俊亨の経営する幼稚園の保母になる。先輩保母の金二順は夫の崔山が安羅を狙っているのを知りヒステリーを起こす。柳夏永は安羅に愛を告白し、一日二人は直指寺チクチに遊ぶ。その後安羅はついに崔山に夜、へやに侵入されるが辛うじて退散させる。

一方、一年後に脱出した玉礼は列車の中で話しかけられた女について町に着いたが、この女の経営する飲屋に連れられていってしまう。ここで仁喆に手紙を書いて待つが連絡は取れない。玉礼は待ちくたびれて都会の工場に働きに出ることにした。が、この女将の紹介で彼女を連れに来たのは崔山であった。崔はテサンテジョン（岾산：大田か？）で下車し玉礼を旅館に連れ込むが意が叶わずとみるや、だまして遊廓に売り飛ばしてしまう。

仁喆の方はなんとか町まで玉礼を追って来て偶然この町で安羅にめぐり会う。彼女らの助けで玉礼のいた飲屋はつきとめたがすでに玉礼はいない。その玉礼は遊廓を夜半にやっとの思いで逃げ出した。そこへこの遊廓から遊び帰りの新聞記者が声をかける。

ここで中断されていなければこの記者が金俊亨に通報することによって玉礼と仁喆は再会することになるのであろうか。〔都邑篇〕の展開は掲載分だけで見ると、主要人物が出揃い安羅のその後が中心の5章までが前半、6章以降、翌春の玉礼を中心とした部分の中盤で、その途中で連載が途切れている。このあと本来の後半部分が続いたはずである。

ここで登場人物について再考してみると、〔農村篇〕では雷雨、仁喆、安羅、玉礼ら若者の善玉と、趙薫、姜太亨、黄日道、松本らの悪玉を対立させ、その中間に申村長、金宗漢らを置くという典型的な人物設定であるが、〔都邑篇〕ではこれがさらに徹底し、善玉（仁喆、安羅、玉礼、柳夏永、金俊亨）、悪玉（崔山、二順ら）の区別ははっきりしており、その中間的人物は登場しない。

張赫宙の初期長編作品について

ところで〔農村篇〕における男勝りの理発な少女である玉礼が〔都邑篇〕ではずるずる引きずられていく女になっているのは性格の統一上問題がある。このことは安羅についてもほぼ同様のことがいえる。

では〈黎明期〉ではこのような類型の人物を設定して勸善懲惡的に何かを啓蒙しようとしたのかといえそうとも言えない。尹雷雨の口から田舎にまで浸透する資本主義の害毒についての説明は聞かれるが作家の関心はそのような社会的、時代的認識よりはこの山村での権勢欲をめぐる、いがみ合いの方にあるように思えるのである。また〔都邑篇〕の世界は通俗的な活劇が中心で、〈虹〉の付け足し部分である後半での李南喆の救出をめぐる活劇と同質の興味本位のものである。

それでは今少し内容に立ち入って検討したい。まず内容の傾向として〔農村篇〕にはかなり‘過激’な政治的な内容が随所にみられる。そのうちの二、三を示すと、

（仁喆のへやに青年10数人が集まり雷雨があらまし次のように話す。）農村に招かれざる資本が侵入するのを防ぎ、あわせて経済状態の変遷を民衆に知らせる必要がある。そのために村民大会を開くべきだ。また仁道の結婚式を利用して運動すべきだ。(88) (要約)

“雷雨は表面上ほぼ解消段階にあった青年会サンマ支部所属だったが、実質的には新たに組織された青年同盟の一員で、サンマ支部設立に向けて努力すべき任務を負っていた。その上でさらにもう一步組織を進めねばならなかった。(それを作者はここではっきりとは書けない。)” (95)

（雷雨のところへ安羅が身の振り方を相談しに来た。その安羅に雷雨はこう言う。）（安羅が抱えている悩みは）“封建的道德に縛られた社会が第一原因であり、都会に出ても完全な人格は求めにくいだろう。それは女性だけでなく無産大衆が皆そうだ。だからそれはまた資本主義社会がすべてそうしてい

る原因なんだ。”(95)

このように雷雨の考えは理路整然としている。ただこれらの部分をもって〈黎明期〉の主題とみなせないことは前言した。現実の運動自体が退潮を余儀なくされていた執筆当時において読者を刺激するに足る小道具の一つとしてこれらはちりばめられるにすぎず、全篇を通しての啓蒙的な意図は〈虹〉ほどにも見られないのである。〔都邑篇〕の方はさらに読者の通俗的な興味を持續させるべく数々の手法を動員している。その手法を挙げると、①人物が不自然なまでにめまぐるしく登場と退場を繰り返す場合(例：都邑篇22)³⁵⁾、②男女がすれ違いを繰り返して会えない場合(例：都46)、③偶然の出会いに頼る展開の場合(例：都50)、④好色的場面の挿入、⑤作者が読者に直接語りかける場合等である。結局、〔農村篇〕では「主義」的語り口の刺激で読ませ、〔都邑篇〕では通俗小説的手法によってまさに通俗そのもので読ませようとしたといえよう。

それでは次に描写面についてみておきたい。この作品で張はなかなか筆力のあるところをみせている。例えば市場の来歴の説明(48)、市場のようすの描写(56)、仁詰が月夜に安羅を待つ場面(63)、趙薫宅での宴会の描写(78~82)、脱村をめぐる仁詰の迷い(120)等手際よく書いている。ここでは〔都邑篇〕(魔窟十九)で崔山におびえる玉礼の不安な心理と行動をよく描いていると思われる一節だけを例示するとどめる。

(旅館で玉礼は崔山が外出したすきに男のふとんを別のへやに移してもらい鍵をかけようとするがこわれていてかからない。)

灯を消した。灯が消えていれば寝ていると思って入ってきやしないだろう？

灯を消して寝床に横になった。よそ行きの服を着たままではどうにも眠れなかった。

起きだしてチマ(スカート)を脱いだ。ねまきに着がえて下着を脱ごうかと思ったが靴下だけ脱いでふとんの中に入った。

張赫宙の初期長編作品について

しかし眠れなかった。

灯を消していればかえてあの男が入って来やすいようでもあった。起きて灯をつけた。急に明るくなると下着だけの自分の姿が恥しくなった。彼女はふろしき包みを解いてふだん着のチマをひっぱり出してはいた。腰ひもで胸のところをきつく縛った。靴下をまたはいた。

寢床に横になると少しは安心できた。

しかしあいつが入ってきたらどうしようと思うとどうしても眠れなかった。(都. 69.)

では表現、表記関係について一瞥したい。まずこの作品では慶尚道方言がふんだんに使われており、テサン(大田?)での部分では一部忠清道方言も出ている。これは地の文にも及び、あまり一般的でないと思われる用語には傍点が振られている。張は彼の日常のことばを使って気楽に書いたようである。また‘一순’(一瞬), ‘수십척’(数十尺)のような漢数字の混用も他の作品同様である。

次に日本語、日本語式表現についてみると、

①日本語の発音をそのままハングル表記したもの：

나카오리 [中折], 하부다이 [羽二重], 「쓰메에리」 [詰襟], 「우와기」 [上着], 가꾸야 [楽屋], 쓰리 [スリ], 스지 [筋], 세리푸 [セリフ], 헨빠이 [返杯], 야지 [野次], 우라끼리 [裏切], 유까다 [ゆかた], 에리 [襟], 유아가리 [湯上がり], 게다 [下駄], 나카이 [仲居], 히야카시 [冷やし]

②日本語式漢字語の朝鮮語音訳：

수인 [数人]

③日本語式発音の外来語表記：

반쓰봉 [半ズボン], 와이사쓰 [ワイシャツ]

④日本語と朝鮮語の合成による名詞：

소구루마 [牛車], 말구루마 [馬車], 끼구루마 [人力車]

⑤会話部分全体が日本語をハングル表記したもの：

- ・ “「야— 이랏샤이」” (やあいらっしゃい) (80)
- ・ “「나마이끼나」 「なまいきな」 (81)

他の二篇にみられるこれ以外の日本語関連の用法はほとんどなく、①の場合も特殊な語が多く、また傍点が付いており使われる場面も限られている。〈黎明期〉は三篇の中では最も後の作品であり朝鮮での日本語の浸透の程度はより深くなっているはずであるがこの作品では日本語がらみの表現はむしろ減っているわけである。これは張が東京から送稿したため朝鮮語で書くことをかえって強く意識したからではないかとも考えられる。

それでは最後に伏字・削除関係について考えたいが、この問題は〔農村篇〕の日本語による改作である《田園の雷鳴》(1940.11, 洛陽書院)と密接な関係があるので両者を比較しながら述べる。なお、〔農村篇〕自体の伏字や削除は意外にもほとんどない。

さて両作品を形式的構成の面からまず比較しておくと二作の章立ての関係は次のようになっている。

〈黎明朝〉〔農村篇〕	《田園の雷鳴》
1章	一章
2章	二章
3章	三章
{ (一～二)	四章
{ (三～八)	
4章	五章
5章	六章
6章	七章
7章	八章
{ (一～六)	九章
{ (七～九)	十章
{ (十～十一)	

張赫宙の初期長編作品について

8章	{	(一) —————	十一章	
		(二～三) ———	十二章	
		(四～八) ———	十三章	〔八=55回の途中 から十四章に〕
		(八～十四) ——	十四章	
9章	—————		十五章	
10章	—————		十六章	
11章	{	(一～四) ———	十七章	
		(五～十一) ——	十八章	
		(十二) ……………		〔ほとんど削除〕
		(十三) ———	十九章	
12章	(一～四)			〔四=100回の大部分削除〕
13章	—————		二十章	
14章	—————		二十一章	
15章	{	(一～二) ———	二十二章	
		(三～十) ——	二十三章	
		(十～十三) ………		〔ほとんど削除〕

この結果〈黎明期〉の章の長さの不均衡はかなり是正され、長いままなのは10章(黄日道)だけとなった。11章 十二(95)の削除は政治的な内容の部分であり、12章 四(100)では安羅の脱出をめぐる事細かな描写がほとんど削除され《田園の雷鳴》では記述がよほど簡略になっている。また15章 十～十三の場合は〈黎明期〉では仁詰と安羅がいっしょに逃げなかったために起こる事件をめぐる〔都色篇〕が展開するためどうしても必要だが、《田園の雷鳴》では物語を完結させればよいので二人いっしょに離村ということに筋を変え、この部分を削除した。

ここで登場人物を対照すると

〈黎明朝〉〔農村篇〕 《田園の雷鳴》

金 ^{イン} 仁 ^{チヨル} 喆	→	金 ^{イン} 仁 ^{ヨン} 英
申 ^{ワン} 完 ^ス 守	→	申 ^{ワン} 完 ^ス 洙
黄 ^{イル} 日 ^ト 道	→	黄 ^{イル} 日 ^{マン} 萬
金 ^{ジョン} 宗 ^{イル} 日	→	金 ^ス 守 ^{イル} 日〔村の書記〕
松本某	→	崔 ^{チェ} 丙 ^{ヒョン} 甲 ^{ガブ} ³⁶⁾

これ以外の人物はすべて漢字まで一致している。ここで問題になるのは崔丙甲である。彼は長らく‘内地’でいて大学の法学部を出て東京の会社勤めの経験がある道会議員にして道内一の富豪という設定である。松本の方は元裁判所の通訳生あがりの道評議員（後の道会議員）という成上がり者であるから崔よりも生臭い存在である。新聞連載当時はこのような日本人を悪徳実業家として描き得たのであるが、4年後の1940年にはこのような設定は日本批判となりかねず、朝鮮人に入れ替えたものであろう。その結果この人物の占める位置はほぼ同じではあるが作品の中での存在の意味と読者に与える印象はよほど違ったものになった。

次に地名を対照してみるとカウオン峠（가원재）→魔中嶺がやや異なるだけであとは삼마동→麻洞，서울나들장터→京津市場，감나무골→柿の谷，갓바위→笠の岩等すべて朝鮮語を意識した地名に置きかえてあるだけで、従って実在と架空の地名の使い分けも同じであり、場所の分布や相互の里程計算も一致している。

それでは次に内容の異同を検討してみると〈黎明期〉を基準にしての削除部分は次の通りである。（数字は連載回，下線は大巾な削除を示す。）

①冗長な部分の一部削除：16, 25, 28, 50, 100

②政治的内容の一部削除：45, 86, 95, 108

③〈後篇〉 不要のため結末部分を削除：122~125

張赫宙の初期長編作品について

②の削除例を一つだけ例示する。

(雷雨が仁詰に) “おれが君を連れてきてこんな話をするのはまず君は君の家から手はじめに暗い夢から醒めるようにしろということなんだ。君の家が目醒めたらその影響が徐々に広く行きわたるじゃないか。” / “しかし仁詰。我々にはそんな民族的な問題も問題だけど……” / “雷雨は理論を展開させて×××の理論を引っぱり出すのだった。” / “この地方ではそんな運動は雷雨のほか数人によって続けられていた。” (45)

また、〈黎明期〉より相当簡略な記述に修正された部分は次の通りである。(数字は連載回、下線は大巾な簡略化を示す。)

①冗長な部分の簡略化：58～60.

②政治的内容の簡略化修正：65～67，88，90，95，107。

比較のため88回の例を示してみると p. 24で引用した部分は大略、「雷雨は仁英の居室で若者たち10数名を集めて演説し、外部の資本がこの地に入るのを防ぐために村民大会を開くかそれが不可能なら仁道の結婚式を利用しようと語る」というように簡略化されている。

以上のような削除と修正により冗長部分は改められたが政治的部分の否応のない簡略化により《田園の雷鳴》には漠然とした叙述が増え、筋をつなぐだけの平板な展開になった部分が生じた。だが、その欠点をカバーするだけの日本語での表現力と構成力を《田園の雷鳴》の時点でも張は持ちあわせていない。

《田園の雷鳴》巻末の「創作ノート」で張は次のように言う。

(〈黎明期〉では) 資本が田舎にはいるにつれての経路と、田舎資本の没落に重点をおきました…³⁷⁾

(一方で《田園の雷鳴》では) 人物の性格や意欲や争ひやに重点をおきまし

た…³⁸⁾

前者についてこれが主題であるとは言えないことは前述した。後者についてはある程度はそうも言えるが、できごとの叙述以上の深みがない。いずれにせよ作家の主観的意図はどうあれ、この「創作ノート」でいうようなことは作品の主題とはなり得ていない。従ってこの二作を朝鮮語と日本語で内容を書き分けたとはいってもこれは内発的な理由による主題の変更というようなものではなく、外部状況の変化に伴う内容の重点の置き方の変更にすぎないものであったといえよう。

Ⅲ

以上検討したことをもとに三篇を比較してみると、まず時の設定では三篇とも執筆時期に近い現代を扱っており場所も作家の経験の範囲である慶尚道地方を中心としていることがわかる。

次に人物設定において〈虹〉では一人の男性主人公李南喆と彼をとりまく数人が中心で、〈三曲線〉では男女三組が複雑にからみ、6人全員がほぼ等しく主人公格である。一方〈黎明期〉では善玉の青年たちと悪玉の大人たちという対立的二層で人物が構成されている。また登場人物が多い。このように三篇それぞれ特徴的だが、類型的な設定を免れていない点は共通しており、生きた人間の複雑な内面を反映するような性格付与はあまりなされていない。このような人物群からでは通俗的な物語しか展開できないのも当然であろう。

形式的な構成面では三篇とも大きく三部分に分けられることで一致しており、しかも中盤部分が量的にふくらむ癖がある。また主要人物は早い段階で皆登場させており、話を主人公への手紙(〈虹〉)や電話(〈三曲線〉)によって導入している点も手法的に似ている。展開を偶然の出会いに頼る点等もその通俗性で共通している。

次に内容面では三篇とも作家の主観的な創作意図はあるものの、主題意識は

張赫宙の初期長編作品について

貧困で、作家自身の主張や対社会認識には紋切り型で観念的な傾向がある。また作品を見る限りでは作家の時代認識は案外弱い。作品の所々に社会改革運動に関する部分はあるがこれも切実性とリアリティーに乏しく、読者の興味を刺激するために書き込んである程度のものである。

一方、描写力においては水準級の部分もあるがそのレベルを作品全体には維持できず、一部でこなれてない朝鮮語も見受けられる。

表現関係では日本語と日本語的表現がみられるがこれは三篇のうち最後の〈黎明期〉で却って減るといふ意外な傾向をみせている。

最後に伏字、削除についてみると、これも後の作品ほどむしろ減っている。これは検閲が緩やかになったからではもちろんなく、作家が自主規制して‘無難’な内容を心掛けるようになったからであろう。それでもなお〈三曲線〉の単行本化（1937. 8.）にあたっては大巾な削除・修正が行なわれ、伏字も増えたのである。〈黎明期〉〔農村篇〕の日本語改作問題については前述したので繰り返さない。

では次にこの三篇と同時期に発表された他の朝鮮語作品との関係を一瞥しておく。

まずこの時期には三篇ほどの長篇はなく、発表機関も雑誌が多い。（前掲朝鮮語作品一覧参照。）この中で《朝鮮日報》紙への唯一の連載である〈戀風〉、日本語作品〈山犬（ヌクテ）〉^{39）}を逆に朝鮮語訳したと思われる〈누대〉（山犬）、中篇の〈谷間斗 情熱〉等その多くは男女の恋情、痴情に関する内容で、長篇作品とは色彩が異なっている。しかも長篇より作品としての完成度が高いものも多い。思うに中・短篇では雑誌の特定読者が対象のため芸術的完成度に力を注ぎ、長篇では新聞の不特定多数の読者のために啓蒙性と娯楽性に意を用いたのではなかろうか。“新聞小説でも興味本位でおわってはならぬと思う。読者に長く感銘を与え、教訓を与えるべき”^{40）}だという〈虹〉の連載にあたっての作家のことばが示唆的である。この啓蒙意識という点では《東亜日報》紙の方針が参考になる。次の一覧表は張赫宙の三篇と前後して同紙に掲載された連載小説である。

李光洙：〈壽〉（土），1932. 4.12.～1933. 7.10.

張赫宙：〈무지개〉（虹），1933. 9.20.～1934. 5. 1.

張赫宙：〈三曲線〉，1934. 9.26.～1935. 3. 2.

沈 熏：^{シム} ^{フン}〈常緑樹〉，1935. 9.10.～1936. 2.15.

張赫宙：〈黎明期〉，1936. 1. 4.～1936. 8.27.

東亜日報社では前述の通り1931～34年にいわゆる〈ヴ・ナロード運動〉を展開しており、沈熏の〈常緑樹〉はその一環としての懸賞当選作であるように、農村を舞台とした啓蒙的な作品の連載に力を入れていたことがわかる。その中で〈三曲線〉はむしろ‘退廃的’な部分が多すぎる感もあり〈黎明期〉後篇の〔都邑篇〕の内容からみる時、これは東亜日報社の当時の方針にそぐわないものであろう。

これまで張赫宙の長篇小説の通俗性を繰り返し述べたが、ここに挙げた李光洙や沈熏あるいは同時期の他の作家の場合もその通俗性は大同小異である。それゆえ張赫宙だけを批判することはできない。むしろこれは朝鮮の近代文学全体の問題であり、当時の作品水準を論ずるにあたってはその文学史的意味が考慮されるべきであろう。

それでは最後に三篇と同時期に発表された日本語作品との関連を簡単にみておきたい。1930～36年までに日本語で発表された作品は30篇近くにあり、そのうちの主な作品は《権といふ男》（1934, 7 篇）、《仁王洞時代》（1935, 7 篇）、《深淵の人》（1937, 2 篇）の三冊の単行本に収録されている。これらの作品は張赫宙自身の体験に基づく慶尚道地方を舞台とした農山村での話が大部分で、一部には自伝的要素も含まれている。このうち特に第一創作集である《権といふ男》所収の短篇には朝鮮の田舎の現実をえぐりとして見せるようなかなり‘過激’な内容を盛ったものが多く、従って伏字も多い。また現に〈追はれる人々〉（1932. 9～10）は朝鮮内で発禁になっている。この傾向が当時退潮を余儀なくされていた日本のプロレタリア文学陣営と混迷気味の日本文壇全体に異色の存

張赫宙の初期長編作品について

在として映った事情もうなずけるものがある⁴²⁾。

張赫宙は《三曲線》の自序で“朝鮮文の小説を書く時、私は東京文壇に発表する作品とは態度を全く異にしている。」と言い、彼には朝鮮民族を優秀な民族にしたいという理想があり、そのためには民族性の短所を直さねばならないので《虹》にその短所を全部書き、それでも足りない所を《三曲線》に加えた」と述べている。それ故、読者から“醜悪な現実ばかり描いて理想がない”などとかえって不評を買っているとも書いている⁴³⁾。つまり本人は朝鮮民族のためを思って東京文壇では朝鮮の“農民階級の生活相⁴⁴⁾”を努めて紹介し一方、朝鮮では彼なりの理想を注入しようと頑張ったのだが朝鮮の読者には歓迎されなかったことになる。張はこういう点も考慮してその朝鮮語作品（特に第二作以降）“娯楽性”をふんだんに取り入れたとも考えられる。

張はまた日本語創作と朝鮮語創作の關係に触れながら次のように言っている。

- ・朝鮮語で書かれた場合に限って朝鮮文学であり、内地語（＝日本語：筆者）で書かれた時には（……中略……）狭義の内地文学の中の一つの位置に存在すると思ふ……⁴⁵⁾
- ・例へ同じ材料を同じ作者がかいたとしても表現言語によって著しく違ってくるのです。⁴⁶⁾

朝鮮語と日本語とでは同じ内容で書いても違ったものになり、いわんや作家の創作意図が全然違ふとすれば張赫宙にとって朝鮮語創作と日本語創作はまったく別個のものと意識され事実、そのように書き分けようとしたのである。しかし二か国語に精通して両文壇にまたがって活躍しようという張の予測は朝鮮語長篇小説の朝鮮内での不評という結果によって揺らぐことになる。一方でこの頃、彼は日本語創作にも一種の行き詰まりを感じて苦しんでいた。⁴⁷⁾ 張の創作活動は切れ目なく続いているように見えるが1936～38年は明らかに彼にとっ

て一つの転機であった。張は自分に対する朝鮮文壇の冷淡さを〈文壇のペスト菌〉(1935.10.)⁴⁸⁾で彼らの自分に対する嫉妬心のせいにし、一方〈朝鮮の知識人に訴ふ〉(1939.2.)⁴⁹⁾でその矛先を朝鮮の知識人一般に拡大して朝鮮に訣別しようとしたのである。この後は朝鮮語作品もあまり書かず、‘日本人’としての日本語作品の大量生産が1939年頃から始まるのであるが、これについて考えることにする。

註

- 1) 任 展 慧；張赫宙論，文学，1965.11，p. 92.
- 2) 林 浩 治；張赫宙論，季刊三千里36号，1983，冬，pp. 221~222.
- 3) 任 展 慧；前掲論文，p. 84.
- 4) 林 浩 治；前掲論文，p. 210.
- 5) 平和出版社，pp. 336~347.
- 6) 一志社，pp. 75~85.
- 7) 後に漢城図書から単行本として刊行。
- 8) 単行本《三曲線》の〈読者に〉等。
- 9) 張赫宙の創作活動を大きく三期に分け、デビューから朝鮮の現実に少しなりとも目を向けていた1938年頃までを「初期」、親日路線を明確にした後、1952年日本に帰化するまでの時期を「中期」、それ以降を「後期」と一応名づけておく。
- 10) 原作には章 No. は付けられていない。
- 11) 各章の小題名は拙訳による。(以下すべての朝鮮語文の訳文は拙訳による。)
- 12) 実質の連載回数。(回数の錯誤が相当あるので訂正したもの。以下他の二篇の場合も同じ。)
- 13) 連載の回数を示す通しNo.。これにも錯誤があるが便宜上原載通りのものを用いた。以下引用の場合は他の二篇も含めて同様に扱う。
- 14) 東亜日報，1933. 9.19.「予告」での〈作者のことば〉
- 15) 文芸，7巻2号，1939. 2.で朝鮮民族の欠陥として激情性、嫉妬深さ、ひねくれ根性などを挙げている。
- 16) 原作には章 No. は付けられていない。
- 17) 連載直前の1934. 8.10.の朝鮮南部の風水害を取り入れたと思われる大洪水の話が出ている。
- 18) 〈三曲線〉に寄せた作者の序文より。昭和14年度漢城図書・図書目録広告による。(原稿は1937年頃書かれたもので単行本の巻頭にその一部がみえる。)

張赫宙の初期長編作品について

- 19) 原載では42回となっているがこれは明らかな誤り。
- 20) 原載では41回だがこれは誤り。「××主義」以下の部分は単行本では削除。
- 21) 他の二篇と共通するものも含む。
- 22) 註20参照。
- 23) 以下この章での比較における章回等は《新聞》のものを基準とする。
- 24) 44回と《新聞》にあるのは誤り。
- 25) 41回と《新聞》にあるのは誤り。
- 26) 1936. 8. 9. ベルリンオリンピックのマラソンで朝鮮の孫基禎^{ソンキジョン}が優勝したがその新聞写真から胸の日章旗が消されていたというもの。《東亜日報》紙は同年 8.28.から翌年 6. 1.まで停刊となった。
- 27) 原載では83回であるが14回目が15回と誤記されて以後一回ずつ回数はずれている。(以下の引用では便宜上、原載通りのものを使う。)
- 28) 原作には章 No. は付けられていない。
- 29) 初出は「一道」であるが101回, 125回では同音異字の「日道」となっている。
- 30) 原作では漢字表記はないが〈田園の雷鳴〉により漢字に直した。
- 31) 漢字では奉禮郡か。実在の奉化郡と禮泉郡から一字ずつ取ったものか。
- 32) なお関連地名も鉄道沿線の店村^{チョムチオン}、龍宮^{ヨンゴン}までは実在の地名でそれより奥はすべて架空のものである。
- 33) 〔農村篇〕では「W」となっている。
- 34) 郡庁のある人口2万の都市とあり、京釜線からの支線乗換駅との記述からこう推定される。
- 35) 以下〔農村篇〕の連載回数と区別するため〔都邑篇〕の回数を(都22)のように略す。
- 36) 《田園の雷鳴》p. 119. では崔丙甲^{ビョンガブ}となっているが, p. 142. 以降ではすべて崔丙早^{ビョンゴ}である。
- 37) p. 325.
- 38) 同上。
- 39) 1934. 3. 執筆, 《仁王洞時代》(1935) 所収。
- 40) 作者のことば, 東亜日報, 1933. 9.19.
- 41) ちなみに出世作《餓鬼道》が《改造》誌に掲載された1932年4月とほぼ時を同じくして同年3月, 日本プロレタリア文化連盟員の全面的な検挙があった。
- 42) この点については前掲任展慧論文や金允植: 韓日文学の関聯様相 (pp. 79~81) にも指摘がある。
- 43) 以上すべて《三曲線》自序よりの要約。
- 44) 作者のことば, 東亜日報, 1933. 9.19.
- 45) 《田園の雷鳴》創作ノート, p. 326.

46) 同上。

47) “私は昨年中(＝1934年：筆者)に発表したような作品と同種の、そして同レベルの創作ならば(……中略……)書ける自信はあるが、それに満足しておられん心的状態が私を苦しめつづけた。(……中略……)私の題材の異風俗性を如何に日本内地の読者に便ならしめ、それが単なる紹介にならないようにといふ努力と、言語や文字への関心も忘れなかった。だのに私の今日の作家的状態は？ 最近に発表した「愚劣漢」「あらしひ」の不評も私の心を幾分か暗くした……”、海印寺紀行、1935.7.わが風土記、1942、赤塚書房所収、p. 64.

48) 三千里、7巻10号。

49) 前掲；文芸、7巻2号。